

「地球環境試料の展示解析による社会教育的情報発信に関する懇談会」

開催報告

吉田孝紀¹⁾・保柳康一¹⁾・大塚 勉¹⁾

¹⁾信州大学理学部地質科学科

Information sending for social education by the analysis of exhibition material
around earth and environmental sciences; workshop report

Kohki YOSHIDA¹⁾, Koichi HOYANAGI¹⁾ and Tsutomu OTSUKA¹⁾

¹⁾Department of Geology, Faculty of Science, Shinshu University

Keywords: information sending, university museum, 情報発信, 大学博物館

はじめに

信州大学理学部地質科学教室では、平成 13 年度教育改善推進費による「山岳地域を対象とする自然との共生を目的とした地域社会の持続的発展と環境保全に関する総合的研究」の一環として、2002 年 3 月 1 日に「地球環境資料の共通データベースの構築と展示解析による社会教育的情報発信の基礎研究」についての懇談会を開催した。このプロジェクトは、信州大学内に所蔵されている地球環境科学標本を統一のデータベースとして整備し、インターネット上の検索システムを構築して、資料の全学的利用と全国の地球環境教育・研究に寄与する効果的な情報発信法を研究・実践することを目的としている。

しかし、現状における大学内部の資料展示や情報発信の方法については、未だに地域の博物館などにくらべて後れを取っている。昨年度までの理学部の新築・改修に伴って設けられた『展示解析室』は、現状では標本展示設備や運営体制が未整備なこともあり、展示施設として十分には機能してはいない。

同時に、『地域に開かれた大学』として、地域との連携をめざした運営法について議論が続いている現状がある。この懇談会はそのような状況の中で、大学の展示施設について、社会からの要請をもとに検討する場として設けられた。懇談会は、趣旨説明(信州大学理学部・大塚 勉)に続き、大学博物館の情報発信のデザインについての基調講演(豊橋自然史博物館館長、糸魚川淳二氏)と、情報発信施設としての大学のあり方についてパネルディスカッションの 3 部から構成されている。パネルディスカッションには、展示や情報発信に関して多様な経験や蓄積を持つ長野県下や近隣の博物館、研究所の学芸員・研究員諸氏の参加を乞い、その運営上の方法論を紹介してもらうと共に、具体的経験や要望を交えて、信州大学『展示解析室』からの情報発信に求められる方法論・運営論について議論がなされた。

以下に、基調講演・パネルディスカッションの要旨を述べる。

基調講演「信州大学展示解析室を考える」
講演者：糸魚川淳二氏（豊橋自然史博物館）

「研究と教育の場である大学と博物館をドッキングさせた大学博物館のあり方については、教官の研究成果や学生の実習の場であること、一般の人々に対してはこれらの情報公開を目的とすることで、学内から一般までを対象とすることができる」。

「展示の基本的機能である『もの』をベースにし、物事の考え方を提示する方法は、見る側のレベル(楽しむ、理解する、考える)を考慮しなくてはならない。大学博物館では、これらのうちのどのレベルを対象を置くかが問題であるが、対象とする人々を満足させられるよう考えるべきである。ただし、ここでいう展示レベルとは、どれかが低くて悪いという比較するものではない。最近の展示形態には、『見せる』『解説する』以外に『体験させる』といった項目が入る。また、展示のあり方として、従来は標本劣化の問題から日光を取り入れた展示室は難しかったが、今日ではUVカットのガラスを使うことで日光を取り入れた明るく開放的な空間にする傾向がある」。

「信大展示解析室は『ガラス張りで見える』という利点を生かし、明るく開放的な空間を考えた方がよい。しかし、50m³という限られた空間でテ-

マ展示ができるのかという問題がある。この問題については、難しいが1~5アイテムの小さなテーマを用意し、これらが独立した自由動線の展示でありつつも、お互いに関連したものになればよいのではないか。さらに、シンボルとなる展示が一つあった方がよい。とにかく、狭い展示スペースの中で展示替えも考慮したダイナミックな空間を作る必要があるのではないか、と思われる」。

「段階では、専門スタッフを配置するのは難しいが、それを理由にこまめな手入れを怠ることをしてはならない。これからの大学のあり方にも関連したことだが、外部とのつながりを意識的に持つ努力をしなくてはならない。海外の大学によくあるキャンパスエコミュージアムのように、地域社会全体を博物館の中で考え、伝承することが必要になってくるであろう。それには、大学が持っている多くの学問的遺産をもっと一般に公開することを念頭において、信大展示解析室の準備を進めていけばよい」。

パネルディスカッション

県下の地域博物館を中心に9名の研究員・学芸員の諸氏を交えて、ディスカッション形式で信州大学理学部『展示解析室』のあり方、特に、

- 1) 理学部『展示解析室』をどう運営するか
- 2) 各博物館・自然史館でなされている実践的運営方法
- 3) 情報発信基地としての大学に求められることとは

の3点について、それぞれの体験をもとに議論した。参加者は、糸魚川淳二氏(豊橋自然史博物館)、河本和朗氏(大鹿村中央構造線博物館)、近藤洋一氏(野尻湖ナウマンゾウ博物館)、田辺智隆氏(戸隠村地質化石館)、成田 健氏(信州新町化石館)、島山幸司氏(茶臼山自然史館)、富樫 均(長野県自然保護研究所)、宮島 宏氏(フォッサマグナミュージアム)、村松 武氏(飯田市美術博物館)の各氏である。信州大学からは、保柳康一・大塚 勉・小坂共栄・吉田孝紀(共に理学部地質科学科)が加わった。

テーマ1: 理学部『展示解析室』をどう運営するか?
・『展示解析室』の公開時間を設定するのか、常時オ

ープンにするのか。セキュリティの問題上、解析室自体は時間設定が必要であろう。例えば、9:00-17:00までのように。

- ・『展示解析室』のみでの展示に留まらず、ロビーも含めたもっと広いスペースでの展示を考えてはどうか。
- ・普通の博物館とは違ったアカデミックな雰囲気を出す方がよい。つまり、専門性を大切にしながらも、外へ開けたものであることが大事である。例えば、大学全体を博物館ととらえ、期間を設定して案内人が、研究している人の姿や研究の途中経過を見せることで、研究の生まれた『場』に対する子供達や一般の人たちの興味を引くことができる。
- ・ドイツのチュービンゲン大学に見られるように、研究室前に研究内容を示したポスターなどを貼るのも効果的な方法である。
- ・『展示解析室』の存在以前に、大学の案内表示が不親切である。いまの時点では、校舎から部屋まで全てにおいて、道しるべとなる案内表示がない。
- ・一般公開に対する大学側の取り組みとして、『自然

のおどろき』といった研究内容紹介のような機会など、今年度は3回ほど企画してきた。反応はまずまずであったが、一般の方々は大学にいるスタッフとその研究を知りたがっており、それらの研究が地域問題にどう答えることができるかを知りたがっている。

《まとめ》『展示解析室』には、単なる大学付属の博物館施設という形態よりも、『研究内容の発信の場』としての役割が期待されている。現状では、大学で行われている研究がわかりやすく市民や地域に向かって発信されているとは言いがたい。利用者や見学者の視点に立った施設の整備、発信方法が必要とされ、その具体像を描く必要に迫られている。

テーマ2：各博物館・自然史館でなされている実践的運営方法

- ・化石採集、レプリカづくりやクラフト教室などの体験活動に力を入れている。静かにお行儀良く見るだけでなく、展示物をスケッチするなど自由に館を利用させる。新年度からは図書室がオープンする(信州新町化石博物館)。
- ・自然と人文に分けて研究成果の展示をしている。伊那谷自然友の会(会員1200人)の強い協力を受けている。大学への要望として、大学紀要を博物館や図書館へ置いてもらいたい(飯田市美術博物館)。
- ・レプリカ、化石採集、学習会や地質観察見学会などの行事を行っている。館のPR手段としてホームページ活用を考えているが、行政上の制限から自由な活用が難しいという問題を抱えている。もう1つの課題として、開館以降初めての展示リニューアルがある。研究の発展によるクラシックな部分や誤っている部分が出てきた(茶臼山自然史館)。
- ・村が運営する小さな博物館の利点を生かして、専門にこだわらない自然の勉強を広く行っている。例えば、新しい標本資料を展示する前に、まず地域の子供達に見せて回るなど。また、対象に応じた活動を行うように心掛けている。例えば、地域住民に対しては幅広い情報提供を、外来者に対しては化石のおもしろさを伝えるようにする(戸隠村地質化石館)。
- ・中央構造線について専門的で取っ付きにくい内容であるが、いかに一般向けに分かりやすく説明をするかという点を工夫している(大鹿村中央構造

線博物館)。

- ・スタッフも設備も不十分であるが、他分野との総合力でカバーしている。自分の専門研究だけで満足してはいけぬ(長野県自然史保護研究所)。
- ・予算がないから展示替えできないのは通用しない。展示替えを考えて、展示ケースは前開きにしてある。そして、市民に理解できる言葉で説明することを心掛けている(フォッサマグナミュージアム)。
- ・自然保護のために何ができるかを考え、地域の将来を語れる博物館にしなければならないと考える。町内の全小学校に、授業で年1回野尻湖を訪れるように働きかけている(野尻湖ナウマンゾウ博物館)。

《まとめ》地域における博物館の存在は、小・中学校の教育の場として大きくクローズアップされつつある。特に地球の歴史・環境をテーマとする展示の場合、その実体が野外にある、基礎的な知識や概念なしには理解しにくいなど、市民にとっては『とっつきにくい』内容も多い。そのため、それぞれの博物館とも『学習会』や『地層観察会』などに工夫を凝らし、地域住民との継続的な連携や協力関係を築いている。大学の展示施設の現状を考えると、このような博物館・自然史館の運営方法のすべて取り込むことは不可能であるが、地域との連携を深める上でのアプローチとしては非常に重要と思われる。

テーマ3：情報発信基地としての大学に求められることは？

- ・博物館でできない部分を大学でやってほしい。
- ・博物館とうまく住み分けてほしい。展示品を並べたから人が来るというものではない。情報発信の場にならなくてはならない。
- ・地域住民からの質問に対して、連携して解答するといった、レファレンスの共有が必要では？
- ・各博物館とのハブのような役割を期待する。
- ・ホームページ上での情報公開で足りない部分を展示室で補う展示形態も考えられる。
- ・大学の先生が博物館にきて、地域の教育や自然保護に対して提言できればよい。
- ・金銭的に苦しくても人とのつながりでカバーできる部分は多い。人のつながりのネットワークの発信地として大学が機能するようになるとよい。
- ・大学展示室に博物館学芸員が向いて、展示方法のアドバイスをすることも考えられる。
- ・大学で専門家が何処で何をやっているか、卒論・

修論の内容紹介などが一般公開されると非常によいのではないか。

- ・どこかが核になるというのではなく、「何処でも核になりうる」というネットワークの関係が望ましい。
 - ・自然体験に乏しい最近の学生を，一般市民の核になれるような研究者として世の中に送りだしてほしい。
 - ・研究管理する人が変わっても，守り続けることができる『ポリシー』を展示に持たなければならぬ。重要な資料が逸散しないようにしっかりした体制を整えなくてはならない。
- 《まとめ》今日における地域博物館は，その機能を『珍しい資料の展示』から『地域教育』『地域情報の発信』へ大きく移しつつある。ただ、『“実体”なくして“情報”なし』と言われるように，情報発信の背景となる『実体』の展示や研究は不可欠

であるが，その一方，常に新しい情報を発信する役割も期待されている。このような多様な要請に答えるために，地域博物館相互や大学を含めたネットワークの構築が求められている。これによって地域博物館相互の展示内容の交流だけではなく，それぞれの地域博物館の持つテーマ性を総合化し，より理解しやすい形で地域に提供することができるようになる。大学にはそのようなネットワークの一端，あるいは基地としての役割が期待されている。同時に，大学の施設であっても，時代が変わっても継承されるべき明らかな『ポリシー』『テーマ性』が必要，との指摘がなされた。これは，大学の役割である学問の継続性の観点からも重要な視点であり，最も優先的に議論されるべき項目となると思われる。

展示解析による情報発信のあり方をめぐって

これまで，大学における研究や技術の社会へ向けた発信方法として、『公開講座』や『体験実験』『自然の驚き(実験・実習を通した大学・市民の交流会)』など様々な試みがなされている。しかし，市民にとって身近な教育施設である地域博物館・自然史館には，その効率的な運営方法や効果的教育方法の蓄積があり，大学側が学ぶべき点が多い。また，昨今の地球環境の保全に対する市民意識の向上，興味の高揚によって，教育研究施設である大学への期待も自然と高まっている。その期待にこたえるべき『展示解析室』は，資料の展示と解説による大学教育への貢献，地域住民との連携，地域博物館とのネットワークの一端あるいは基地，といった非常に多岐にわたる要請が寄せられている。

しかし，この中でも，『大学での研究内容の発信の場』としての役割は，現在，最も必要とされるものである。その上で，『公開講座』『野外観察会』『WEB博物館』『WEB 研究内容紹介』といった形で情報発信の機会や形態を多様化し，様々な社会的要請に応えるべきものでなくてはならない。

『地域に開かれた大学』としての期待に応えるために，恒常的な情報発信の場の設立は不可欠である。今後の大学からの情報発信は，単に論文や研究集会を通しての発信だけではなく，市民や地域を対象としたものを加えた多様かつ，双方向的なものとなる

う。したがって大学は，そこで何が研究され，社会に対してどのような貢献がなされているかを明示的に示す必要がある。これには教員の研究内容や論文タイトル，卒業・修士論文のテーマなどを広く公開するなど，比較的簡便な部分からはじめることもできよう。さらに大学教育と地域社会双方に望ましい影響を与える情報発信の方法がどのようなものであるかを模索する必要がある。

謝辞

信州大学工学系研究科の田中美穂さんには，録音テープからの会話内容のデータ化と議事録の取りまとめにご協力をいただいた。また，信州大学理学部の小坂共栄教授にはパネルディスカッションの参加と共に，有益なご助言をいただいた。ここに記して謝意を表します。